ちいさなちいさなエコのはなし

その一　「MOTTAINAIを広めよう！　マータイさんのお話」

大友　綾

みなさん、初めまして。親愛なるKさんより、会報の記事を書いてみませんか？と声をかけていただき、こうして誠に恐縮ながら自分が日々考えること、子どもたちの未来の地球のこと、環境問題、日常生活のちょっとしたエコのこと、などをとりとめもなく書かせていただきたいと思います。稚拙な文章で誠に失礼いたしますが、おつきあいのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

＊＊

突然ですが、私の夢は、いつの日かさほど大きくない土地を持ち、そこに畑や田んぼを作って子どもたちと一緒に土まみれになって生活することです。そこでは、できるだけ持続可能な循環型の生活スタイルで、できれば電気も水も自給し、ゴミとなる物がなるだけゼロに近い・・・そんな生活を子どもたちと共有できたらと思っています。そして、ニュージーランドは基より、日本にも呼びかけて、一人でも多くの子どもたちに自然の中で生活する尊さと楽しさを体感してもらう自然体験教室なんかをやれたらいいなぁ・・・これが近年日増しに大きくなる自分の夢であります。

さて、そんな私が環境教育に目覚めた背景を少し、お話しさせてください。

私が日本で勤めていた新玉小学校は、神奈川県小田原市の中で最も古い学校の一つで、１００年以上の歴史がある伝統校でした。小田原市は北条氏一族が栄えた城下町であり、新玉小学校はこの小田原城付近の商店街の子どもたちが通う、町中にある小学校です。その新玉小には、「新玉池」という、ホタルのやってくる小さな池がありました。

ホタルの幼虫の餌となるカワニナ

私が新採用で赴任した当時、若造だった私には、毎日池の縁に立ち、池の中の生き物の様子を眺める教頭を見て、「教頭ってこんなにのんびりしてていいのかな・・・」くらいにしか思えず、実は教頭先生は素晴らしい教育実践をされていることに全く気づいていませんでした。そうなのです。この「新玉池」には、小さいながらも、一つの素晴らしい生態系が培われていたのです。（これをビオトーブといいます。）

「新玉小の子どもたちに、自然のホタルを見せてあげたい！」という思いから出発したこのピオトーブ作り、
①ホタルが飛ぶようになるには　幼虫の時の食べ物のカワニナが→

②カワニナが住めるためには　食べ物の珪藻類が→
③珪藻類が育つには　養分のある土ときれいな水が→
④養分のある土があるためには落葉樹が・・・
という具合に、「風が吹けば桶屋が儲かる」式の自然界の絶妙なバランスが不可欠でした。

　教頭先生と理科専門の先生たち、そして保護者の有志の方々で作られた「池と花の会」というボランティアの会のみなさんが、いろいろ研究し、月に何度も集まって池を掃除したり、回りに美しい花を植えたりしながら、少しずつ少しずつ豊かな生態系を作っていきました。不思議なことに、多様な野生の生き物たちが徐々に出現するようになるのです。とうとう５年目にゲンジボタルの成虫が夏の夜に飛び交う美しい空間となりました。もちろん、ホタルだけではなく、四季折々のいろいろな生き物たちがこの新玉池を彩ります。春にはソメイヨシノの花びらとアゲハチョウが、夏にはオニヤンマやシオカラトンボ、イトトンボなどのトンボたちが、秋にはカリンの実と真っ赤に染まった木の葉が、冬には落ち葉や餌をついばむサギが・・・メダカ、コイ、カエル、トカゲ・・・たった３m四方ほどの小さな空間に、こんなに多様な生物がいるなんて！それもこんな町中に！そのホタル池で、子どもたちと一緒に自然観察したり、休み時間に遊んだりしていると、いろんな発見や喜びがいつもあることに気がつきました。子どもたちの目線で見る自然って何だか大人の感覚とまた違うんだな。自然と寄り添う子どもたちの顔って生き生きしてるんだな。そんなことを間近で感じてから、わたしの環境教育に対する興味が始まりました。

　さて、前置きがだいぶ長くなってしまいましたが・・・
　みなさんは、ワンガリ・マータイさんをご存知でしょうか。
２００４年に、環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人女性です。マータイさんが、２００５年の来日の際に感銘を受けたのが、「もったいない」という日本語でした。
　日本語の「もったいない」は、環境３R（Reduce、Reuse、Recycle）を一言で表す言葉であり、さらに命の大切さや、かけがえのない地球資源に対するRespect（尊敬の念）という意味も込められていることを知り、子どもたちや次世代へのメッセージを含んだ言葉として深く感銘したそうです。そして、環境を守る国際語「MOTTAINAI」として、世界に広げること

を決意しました。

　また、マータイさんは「グリーンベルト運動」という植林活動を１９７７年からずっと続けてきました。たった７本の木を植えることから始まったこの運動は、これまでにケニアをはじめとするアフリカ大陸全土で約５１００万本もの木を植えてきたそうです。植林には、貧困に苦しむ女性を中心に、延べ１０万人が参加。環境保全だけにとどまらず、植林を通して貧困から脱却、女性の地位向上、ケニア社会の民主化などにも大きく貢献したそうです。このグリーンベルト運動の中に、マータイさんは「MOTTAINAIチーム」を儲け、ケニアで大量のゴミとなって問題になっているプラスチック袋の削減を進めました。東アフリカに、水と緑を取り戻すのが目的のこのグリーンベルト運動は、マータイさんが死去された２０１１年以降も、住民の皆さんの積極的な協力もあり、目標数を上回る植林活動が続いているそうです。

　日本には、昔からちゃんと環境を守るという意識が「もったいない」の一言に込められてきたんだ！と、マータイさんの本を読んで日本人である自分が少し誇らしく感じられました。
　それなら、この大切な言葉「もったいない」を我が子にも伝えていかなければ。そしてそれが環境３R＋Rにつながる意識となっていくように、子どもたちと一緒に毎日を考えながら楽しく暮らしていけたら、と思うようになりました。
　そして我が家のエコの取り組みは、この「モッタイナイ」の気持ちからから始めてみよう。そうさらに強く思ったのが長男が生まれて半年経った頃でした。その時期は自分のアレルギーとの格闘の日々でもありました。自分の体調が、人が生きることと環境とのバランスについてを考えるきっかけとなってくれました。私たちはこの地球で自然の中の一部として共生している。自然に寄り添い、環境に負担をかけない生き方を工夫していけたら。そして、何十年も先の地球で、我が子やそのまた子どもたちが安心して平和に暮らせる環境をちゃんと整えてあげられたら。そう考えるきっかけをこの時の体の不調からもらうことができました。

　そんなわけで、無理のない程度に、こつこつと続けられることからやっていこう。そう決心するに至ったのです。そのときからちょこちょこと心がけている我が家の「モッタイナイ」。

お米のとぎ汁をためる長女とそれを見守る長男、次女。

コメのとぎ汁を集めて畑にまいたり。ラップを使わず手ぬぐいやお皿をフタに利用して残り物の保存を工夫したり。そんな小さなことですが、毎日の生活で当たり前のように実践していけば、子どもたちに「モッタイナイ」の精神がしみ込んでいくのかな。そんなことを思う今日この頃です。

＜追伸＞

今年も３月２３日夜８：３０からの１時間は、「Earth Hour」でした。

この「Earth Hour」は、２００７年３月、シドニーで温暖化防止キャンペーンの一環として始まったもので、今年で７回目を迎えます。

世界中の人々が、同じ日・同じ時刻に電気を消すアクションを通じて「地球温暖化を止めたい！」「地球の環境を守りたい！」という思いを示す国際的なイベントです。様々な国の現地時間に合わせて行われるため、時差の関係から、東から順に消灯が地球をぐるりと巡っていきます。このときは、キャンドルの灯りで過ごしたり、暗闇の中で過ごしてみたり、電気を使わない１時間を過ごすことができます。実は、オークランドでもスカイタワーの灯りが毎年このEarth Hourに合わせて消灯されているのをご存知でしょうか。今年も２３日土曜日の８：３０から９：３０までの１時間、スカイタワーの電飾は消される予定です。（この会報が皆様のお手元に届く頃にはもう終わっていることと思います。）

このイベントを知った４年前から、我が家でもこの日の１時間はキャンドルで過ごす夜を楽しみにしています。家中の灯りを消して、ほの暗いキャンドルの灯りで過ごす時間は、静寂に包まれ、厳かないつもと違う雰囲気を味わえます。そして、そんな時間を家族とともに過ごすことで、こうやって健康に生かされていることへの感謝、電気を使って便利に暮らせることへの感謝を感じる貴重な時間でもあります。

来年の「Earth Hour」、みなさんもキャンドルの灯りで過ごす１時間を体験してみてはいかがでしょうか！？

＜大友　綾＞

小田原での小学校教員時代は、環境教育や野外活動教育の研究にも取り組む。サスティナブルな生活環境、エコロジーな生活を目指して日々奮闘中。スクールホリデーには、子ども向け科学・自然体験ワークショップ「わんぱく塾」を（たまに）実施中。